

My Favorite Things

マイ・フェイバリット・シングス

Eric Alexander Quartet

エリック・アレキサンダー・カルテット

- シュガー
Sugar 〈S. Turrentine〉(7:17)
- トリステ
Triste 〈A. C. Jobim〉(7:26)
- 星影のステラ
Stella By Starlight 〈V. Young〉(7:30)
- マイ・フェイバリット・シングス
My Favorite Things 〈R. Rodgers〉(10:25)
- エアジン
Airegin 〈S. Rollins〉(6:24)
- 時のたつまま
As Time Goes By 〈H. Hupfield〉(6:53)
- ラバー・マン
Lover Man 〈Ramirez, Sherman〉(9:20)
- レイジー・バード
Lazy Bird 〈J. Coltrane〉(6:41)

エリック・アレキサンダー Eric Alexander 〈tenor sax〉
デヴィッド・ヘイゼルトajn David Hazeltine 〈piano〉
ジョン・ウェバー John Webber 〈bass〉
ジョー・ファンスワース Joe Farnsworth 〈drums〉

録音：2007年9月5日 BST Studio、東京

© 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara
Recorded at B.S.T. Studio in Tokyo on September 5, 2007
Engineered by Shuji Kitamura
Mixed and Masterd by Venus Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover and Artist Photos by Mary Jane Photography
Designed by Taz

ック・アレキサンダーのプレイが幅広いファンにアピールする、大きなポイントになっているのではないだろうか。

それにしても改めて思うのは、エリック・アレキサンダーが本質的にもっているストーリー・テラーとしての素晴らしい資質である。テナーによる即興演奏をつうじて、現代の美しい物語をかたることができるプレイヤー。細やかなテクニクの中にも音楽を大きくとらえて、演奏にゆったりした流れを作りあげてゆくエリック。それはモダン・ジャズの時代に巨匠と呼ばれたミュージシャンが身につけていたものと、同レベルのものだといって良いだろう。現在エリックが使用している楽器は、アメリカン・セルマーの“マーク6”。そしてマウスピースはオットーリンク。まさにモダン・ジャズの黄金時代に製作された、サックス・プレイヤーなら誰もがあこがれる組み合わせで、あの時代の雰囲気を描くには最適のセッティングである。デビッド・ヘイゼルトajn（ピアノ）ジョン・ウェバー（ベース）ジョー・ファンスワース（ドラムス）からなるリズム・セクションも、エリック・バンドのレギュラー・メンバーで、リーダーとぴったり息の合った、素晴らしいサポートをおこなってみせている。ともあれエリック・アレキサンダーの資質が、最良の形で現れているこの一枚。若いジャズ・ファンも、またベテランのファンも十分に満足できる、最高の名曲、名演集ということができただろう。

- シュガー

黒人の名テナー、スタンリー・タレンティンが70年、CTIに吹き込んだファンキーな名作。エリックはオリジナルに優るとも劣らないほどの押し出しをもつ、堂々たる吹奏に終始している。随所にモダンなハーモニー解釈を織り混ぜながら、細やかなフレーズをスピーディに吹ききってゆくあたりは、いかにも今日的。過去のジャズ・テナーのあらゆる伝統を呑み込んで、自身を表現して

ゆくエリックのプレイが聴きものになっている。

- トリステ

“悲しみ”と題されたこの曲は、アントニオ・カルロス・ジョビンの手になるボサ・ノヴァの名作。もっともエリック・アレキサンダーは、クールなボサ・ノヴァのイメージを覆すかのように、あくまでホットなエモーションを注ぎ込んだ情熱的な吹奏に終始する。乗りの良いイントロからテーマ〜アドリブへと、複雑なフレーズをすさまじい勢いで吹きまくるエリックが、ほんとうに凄い。

- 星影のステラ

ヴィクター・ヤングが書いたロマンティックな映画主題歌である。エリックは、いかにも彼らしい細やかなフレーズをはさみながらも、あくまでしつとりと美しく、ロマンティックな雰囲気を描き出してみせる。たっぷりした表情から豊かな香気が立ち込めてくるような、大人のバラードになっている。

- マイ・フェイバリット・シングス

リチャード・ロジャースの手になるアルバムのタイトル曲は、1959年のミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」の中のおなじみのナンバー。ジャズでは何といてもジョン・コルトレーンの代表的なレパートリーのひとつとして知られている。エリック・アレキサンダーは、コルトレーンが演ったように、3拍子のリズムに乗せて燃えるようなテナー・ソロを繰りひろげてゆく。コルトレーンがソプラノ・サックスで吹いたモーダルなフレーズを、随所にテナーでよみがえらせながら、何かに憑かれたようにパワフルに吹きまくるエリック。まさにコルトレーンのスピリットをそのまま受け継いでいるかのような熱演が展開されている。

- エアジン

ソニー・ロリンズの作曲になるナンバーで、タイトルは“Nigeria”を逆から綴ったもの。コルトレーンとロリンズという、およそスタイルの異なるプレイヤーたちの名曲を、自身のスタイルで一気に演じきっているのも興味深い。ここでもエリックはアップ・テンポに乗せ、凄まじいばかりのドライブをきかせて聴き手を圧倒する。まさにメロディックかつパワフルなエリック節の魅力が全開！といった感じの一曲である。

- 時のたつまま

映画「カサブランカ」の中で印象的に使われていたメロディー。エリックはいきなりテーマを吹きはじめ、そのまま細やかなフレーズを織りませながら、ゆったりと大きなプレイの流れを描き出してみせる。エリックの懐の深さが、よく出ているバラード演奏である。

- ラバー・マン

ビリー・ホリデイの名唱などで知られる、感傷的なバラード。しつとりしたテーマから倍テンポになるスインギーな演出を加えて、エリックは豊かな起伏をもつスケール感たっぷりのプレイに終始する。あふれんばかりのエリックの歌心に、あらためて大きな感動をおぼえる一曲である。

- レイジー・バード

ブルーノートの人気盤「ブルー・トレイン」に収められていたジョン・コルトレーンのオリジナル。これぞハード・バップ!といった感じのテーマから、エリックはスピード感あふれる情熱的なプレイを繰りひろげてゆく。リーダーのイマジネーションを駆り立てるかのように、スリングなサポートをみせるドラムのファンスワース。カルテットのメンバー4人が一体になった、ホットな快演が繰りひろげられている。

いま実力、人気ともにトップの座に位置しているテナー・サックス奏者のエリック・アレキサンダーが、またまた目の醒めるような素晴らしい作品を送り出してくれた。「スイングジャーナル・リーダーズ・リクエスト　マイ・フェイバリット・シングス」というタイトルからも

わかるように、本アルバムはわが国のジャズ専門誌“スイングジャーナル”の読者の人気投票によって選ばれたジャズの名曲ばかりを、エリック・アレキサンダーのカルテットが演奏するという好企画盤。つまりジャズ・ファンがエリック・アレキサンダーに演奏してほしい、エリックのテナー・プレイで聴きたいと望んでいるナンバーばかりを集めたという、まさに夢のような企画のアルバムなのである。そんな読者の思いが伝わったのか、ここでのエリック・アレキサンダーは燃えるような情熱をプレイに注ぎ込んで、エモーションな吹奏に終始する。単にファンが選んだジャズの名曲集という企画の面白さだけでなく、どの曲も力強いエリックの音楽として表現してゆくのが、大きな聴きどころ。“リーダーズ・リクエスト”という企画におもねるのでなく、第一級のプレイヤーとしてのエリックの実力が縦横無尽に発揮されているのが、本アルバムの何よりの素晴らしいさになっている。

しかしよく考えてみると、このようにジャズの名曲ばかりをとりあげて演奏するのは、ミュージシャンにとって、けっして容易なことではない。これらの曲については、ほかにもいくたの名演があるし、それ以上のアピールをもつプレイをおこなおうとするならば、ほんとうに真剣に取り組んで充分に個性を発揮してゆかなければならないからである。特に本アルバムに含まれているナンバーは、これまでも多くのテナー・サックス奏者による名演が残されているものばかり。だからこの種の企画は、逆にミュージシャンによほどの自信がなくてはできないものであるといえるかもしれない。エリック・アレキサンダーはこれらのナンバーに真正面から取り組んで、燃えるような情熱をプレイにぶつけてゆく。どの曲に対してもストレート・アヘッドな魅力を生かして、テナー・サックスの王道をゆくスタイルで正攻法のアプローチをおこなってみせるのが気持ちよい。“心からジャズを愛している日本のファンやスイングジャーナルに、エリックはほんとうに親近感をもっている。だからこの企画には、エリックもとても乗り気だったんだ。彼はこのレコーディングのために、わざわざ日本へメンバーを連れてやってきたくらいだからね。スタジオは2日間キープしておいたけど、レコーディングは一日で完了してしまった。全員がフルにパワーを出し切ったので、終わったあとは皆へとへとだったけどね・・・”とヴィーナス・レコードのプロデューサー、原哲夫氏が楽しそうにふり返る。

エリック・アレキサンダーのファンの方にはあらためて述べるまでもないことではあるが、彼はテナー・サックスという楽器を豪放に歌わせるだけでなく、いつもメロディックな暖かさもつプレイをおこなって、聴き手の心をおおらかに包み込んでくれる。エリックの演奏からはいつもジャズそのものもっている豊かなハートが、ひしひしと伝わってくる。それはジャズの“ソウル”ということになるが、白人であるエリックにはジャズの“ハート”というのがふさわしい。言い替えるならばジャズのもっているぬくもりや人間臭さのようなものを、エリックは何よりも大切にしながら、彼ならではのフィーリングをプレイの中に生かしてゆくのである。そういったエリック・アレキサンダーの個性は、特に50~60年代のモダン・ジャズ・ナンバーを演奏するとき、最高に発揮されるように思う。つまりこのようなアルバムのことだ。あの時代のモダン・ジャズがもっていた、暖かなグルーヴが感じられる演奏。シャープなフレージングの中に、そういったものを程よくミックスさせているあたりが、エリ